様式第２号

平成２５年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２６年　３月３１日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td>栄養</td><td>職 名</td><td>教授</td><td>氏 名</td><td>川上　貴代　　印</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="6">炎症性腸疾患の食事療法に及ぼす心理要因に関する研究</td></tr>
<tr><td>交付決定額</td><td colspan="6">300 千円</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td>所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>川上貴代</td><td>保健福祉・教授</td><td colspan="2">栄養教育</td><td colspan="2">研究の総括
データまとめ</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>冨岡加代子
久保田恵
田淵真愉美
川上祐子
平松智子</td><td>保健福祉・准教授
保健福祉・准教授
保健福祉・講師
中国学園大学現代生活学部・教授
福山大学生命工学部・准教授</td><td colspan="2">臨床栄養
公衆栄養
給食管理
臨床栄養
臨床栄養</td><td colspan="2">データ分析
データ分析
データ収集
データ解析
データ収集と解析</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="6">慢性疾患である炎症性腸疾患の治療目標は、合併症の発症・進展を予防し、患者の Quality of Life（生活の質）を維持・向上させることである。炎症性腸疾患（IBD）である潰瘍性大腸炎（UC）及びクローン病（CD）は原因不明の難治療性慢性消化管疾患であり、生涯にわたり合併症予防、コントロールを良好に保つために、食事療法は治療の基本とされる。しかしながら食事は患者自身によって行われる自己管理行動であり、病気やその治療に対する考え方や認識、感情等心理的要因は自己管理行動の開始と維持に影響すると考えられる。ここで食事管理に関する行動変容を起こす概念として、自己効力感がある。しかし炎症性腸疾患患者を対象にした食事に関する自己効力感についての先行研究はこれまで見られない。本研究では、医療従事者として患者の自己効力感を高めることができる支援や指導内容や、今後の IBD 患者の QOL の向上に役立てることを目的とした炎症性腸疾患患者に対する食事自己効力感力観尺度の作成、その食事自己効力感尺度の信頼性・妥当性の検討を行い、食事管理に対する自己効力感および QOL の関係を検討した。</td></tr>
</table>

次頁に続く

調査研究実績の概要	岡山県内の医療機関に外来通院する患者76名に、食事療法とQOLに関連する要因についての質問票調査を行った。アンケート結果を統計処理し、食事自己効力感尺度について信頼性と妥当性の検討を行った。また、食物摂取頻度調査を行い、栄養素等を算出したのち、食事自己効力感との関連性を調査した。 尺度原案16項目から因子負荷量の低い項目を除き、食事自己効力感尺度として14項目を選定した。選定した14項目は4つの因子「食事療法による良好な心身及び精神状況」、「食事療法についての情報取集」、「食事療法への称賛と指導」、「食事療法の自己管理」から構成されることが明らかとなった。また、この4因子は先行研究から自己効力感を喚起すると提唱されている「生理的情動的状態」、「代理的経験」、「言語的説得」、「遂行行動の達成」に合致すると考えられた。Cronback α係数は高い内的整合性をもつことが明らかとなり、信頼性と妥当性が確認され、炎症性腸疾患患者の食事自己効力感を測定できるものと考えられた。そこでUCとCD栄養素等摂取量について比較したところ、多価不飽和脂肪酸摂取量に有意差が認められた。さらに、食事自己効力感との関連については、脂質エネルギー比と多価不飽和脂肪酸において負の相関が見られた。 本研究によりＩＢＤ患者での脂質摂取の制限や、脂質の質を維持できている患者ほど自己効力感が高いことが示された。IBD患者にとって活動度の重症化が及ぼすQOLの低下を防ぐためには寛解期の維持が必要であり、寛解期の維持には食事療法が重要である。さらに、食事療法を継続し自己効力感を高めるためには、食事療法による成功体験を患者自身が経験し、その成功を自ら実感し積み上げていくことが大切である。したがってこのような患者の自己効力感を高めるための指導が重要であると推察され、脂質制限を含めた食事療法を遂行させ、寛解期を維持していくには、4つの要因から構成される自己効力感の評価を行うことが重要と考えられた。そしてそれらに沿った栄養指導を行い、継続的に自己効力感を高める食事介入や栄養指導を行うこと、患者のセルフケア行動を導き、QOL向上に貢献することが望まれた。今後は、食事介入や栄養指導によって、食事のセルフケア行動遂行や病態にどのように関連するのか検討されることが期待された。

成果資料目録	炎症性腸疾患患者の食事管理に関する自己効力感とQOLに関する調査・検討：川島愛子 , 松澤奈央子 , 石井順子 , 小野晋平 , 保手濱由基 , 木野山真紀 , 森谷行利 , 冨岡憲明 , 武田知恵子 , 川上祐子 ；中国学園紀要 9, 9-16, 2010-06-16